

炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏



第十二話 八尾の別当 べつどう

平野将監重吉ひらのしょうげんしげよしを乗せた船は、深野池ふこのいけから新開池しんかい池を経て大和川おみ（現在の長瀬川）を遡上そじょうした。

途中、かれを警護する渡辺党と水走党みずはひの巡視艇めぐりべいが睨み合う場面もあったが、たまたま視察に出
ていた水走党の首領・水走康政みずはいやすまさが、例の「笑顔」で収めた。

兩岸の稲穂の群が秋風に波打つ。八尾の船着場に着くと、鎧直垂よろいひたたれに身を包んだ毬栗頭いかりあたまの若者
が従者二人とともに将監を出迎えた。

「源八げんぼちどの、まだはようござる」と笑って諫める将監に

「義兄上あにうえ、向こうは孫子そんしを読んでいると聴く。どのような詭道きどうを用いるやも知れぬ」と返す

源八。かれは将監の妻の弟で、大和川流域を実効支配する八尾氏の当主・八尾別当やべつどう源正げんしょうの嫡男
で、先ごろ元服した顕幸けんこうである。

八尾氏は、清和天皇第六皇子・貞純親王の子で臣籍降下した源経基みなもとのかねもとの嫡男・満仲みつなかを祖とす
る清和源氏の嫡流で、その中でも大江山の酒香童子しゅくてんどうじを退治するなどの武勇伝で知られる
源頼光みなもとのよりみつの末裔にあたる。源八はこの頼光を神の如く崇拜しており、いつも左右に渡辺猛わたなめのたける・坂

田金五たのきんごという同世代の屈強な郎党を従えている。猛は頼光第一の郎党・渡辺綱わたなべのつなの末裔にあたり、八尾氏と攻守同盟を結ぶ摂津渡辺党の当主の子の一人で、金五は「足柄山の金太郎」こと坂田さかたの金時きんときの末裔を称し、常々マサカリを担いでいる。三人と共に別当が待つ八尾城（矢尾城）へと歩く。かれらの後を続く荷台には大量の矢と首桶くびおけが積載されている。源八はこの初陣を大量の敵兵の血で飾るつもりで勝つまでは退かぬつもりだろう。その並々ならぬ覚悟には理由があった。

八尾氏の祖にあたる摂津源氏嫡流・多田氏は、天皇家・摂関家の継承争いから源氏・平氏が同族で敵味方に別れて戦った保元ほろげんの乱（1156年）では、傍流ぼろりやうに当たる河内源氏と共闘したが、その両巨頭が「武家による覇権」を巡って戦った平治へいじの乱（1160年）では平清盛に加勢。後に従三位まで昇進しながら、「驕る平家」おごるへいけに叛旗はんきを翻し、東国・北陸の源氏が挙兵するに至る端緒たんちよをつくった源頼政みなもとのよりたか（馬場頼政）よりも「家格」では上に当たる。その当主・多田行綱ただのゆきつなもまた従五位藏人くろうじという最下位ながら公卿の地位にあった。かれが歴史の表舞台に登場するのは、後白河法皇とその側近の公家や僧らが平家討伐の謀議を図ったとされる「鹿ヶ谷事件」しかがたに（1177年）。酒宴の末座にいたかれはその一部始終を清盛に「密告」。近臣らは断罪され、平家はさらなる専横を極めた。その清盛の死と、北陸道を攻め上った木曾義仲きのそのよしなかによって西国に追いやられた平家は、かつて都を置いた摂津国福原（神戸市中央区）を奪還したが、鎌倉から派遣されて来た源範頼のりより・義経（いづれも頼朝弟）らによる挟撃によって再び讃岐（香川県）へ逃避。この時、源義経率いる丹波路侵攻軍にいた行綱はその土地勘を活かして、福原の裏山に当たる鴨越ひよどりじえ（神戸市兵庫区）から逆落として平家の陣営を急襲。多くの公達きんだちを討ち取った。が、数キロ離れた須磨一ノ谷の鉢伏山はちぶせやまからまず馬を降ろした後、徒歩で駆け降りた義経の戦略と混同され、なんの褒美も無かったばかりか「清和源氏の嫡流」を欲する頼朝によって代々受け継いで来た多田荘（兵庫県川西市）を追われる羽目になった。行綱には「密告」の逸話だけが残った。

― 謀略・詭道を用いず、真正面から闘い、敵を粉碎して父祖の汚名を雪ぐ―

そんな悲願が、この若い毬栗頭のなかにあった。かれらの本拠地は八尾城（現在の八尾神社）を中心に東の大和川の水運を掌握し、南西部で楠木党の恩智氏おんぢ・神宮寺氏じんぐうじ・志貴氏しきと接していた。楠木党は楠根川くすねがわ（現在の第二寝屋川）境界を主張していたが、八尾氏は当時の河内の大動脈

で現在の数十倍もの川幅を有した玉串川の東半分にEEZ(排他的経済水域)を設定し、渡辺党の水軍を常駐させていた。このことで度々小競り合いが起き、両党の間で討ち取った、討ち取られたが繰り返され、その度に首桶を乗せた船が行き交った。

別当顕正は、新堂寺(現在の常光寺)の本堂にいた。八尾氏は奈良時代に行基が開いたとされるこの寺の住職を兼ねており、当主は「僧正」という高い階級を持っていた。後にこの寺は「八尾地藏尊」と呼ばれ、ここから日本の「盆踊り」が生まれる。源八は明日にでも起こりうる会戦に向けての決意を父に述べ「物見にゆく」と席を立った。猛と金五がそれに続く。

―婿殿―と顕正が差し招く。将監はにじり寄りながら懐中から書状を取り出した。三日前、洛北の西園寺館に届いたもので送り主は―楠木右衛門尉(正遠)―。鎌倉からの帰途、近江と美濃の境にあたる中山道番場宿(滋賀県米原市)より側近の伊賀者・柘植五郎に届けさせたものだ。―苜田がすめば、倅をよしなに―

の一文で結ばれた文面を一読した後、顕正は―婿殿、倅をよしなに―と将監に文を返した。山門を出ると、楠根川の向こうの萱振あたりから農民が最低限の家財道具を積んで避難して来ている。源八たちが命じたのであろう。やがて現在のアリオ八尾あたりで、物見から戻って来た源八主従と行き交った。みると箆の矢が一本も無い。玉串川を巡視する水走党の舟に遠矢を射かけ、挑発したのだろう。―やれやれ―という顔をする将監の肩にポンと掌を置き「義兄上、明日は高見からご検分なされよ」の一言と自信たつぷりの笑みを残して去る義弟。当時の楠根川は幅十メートルにも満たない農業用水路だったが、橋が少なかった。将監は後を追って来た平野の郎党たちに早急に材木を買い集めるよう命じ、自らも市場に馬を走らせた。



二年半ぶりに河内に戻った楠木正遠は、稲刈りの進む玉櫛の荘を見回り、池島館に戻る途中、桜井の馬場に建てた櫓の上から恩智川の下流方向を眺めた。

ここで、まだ幼かった多聞丸らに弓や馬の稽古を付けた。鎌倉では、旧友で北条得宗家内管

領の長崎左衛門尉高綱の要請で、北条家の子弟らに武術を教えた。普恩寺流の北条仲時や得宗家の次男・北条泰家は幼いながら上達が早かったが、いずれ執権を継ぐ立場の得宗家嫡男・北条高時は弓矢そつちのけでいずこかの大名が贈って来た仔犬とじゃれていた。贈り主は「犬追物」という武芸鍛錬に使うようにと差し出したに違いなかったが、一弓矢で犬を追うなぞ、わしは好かん。だいたい気の毒じゃ一の一言で愛玩犬に変更された。後に別の大名が犬と犬を闘わせる「闘犬」を勧め、これに傾倒・惑溺するに至るのだが、この頃はまだ高綱ら得宗家被官に担がれた心根の優しい少年に過ぎなかった。そんな北条家の「公達」らをみながら、いつも我が子らのことを考えた。

一撰津源氏に不穏な動きあり一との理由で高綱に帰国を願い出ると、一年の任期が二年を過ぎてしまったこともあってか「三郎」は寂しげな眼でこれを許した。

近江番場の宿から京にいる平野将監に内々の文を送り、昨夜は京の長女・るいの嫁ぎ先の寺に一泊。るいの夫・円光の実兄で播磨の豪族・赤松則村(円心)らの挨拶を受けた。

その夜は、嫡男・俊親と久方ぶりに酒を酌み交わした。かれは昨年、日野家の縁者の娘との間に男児を設けていた。楠木家の嫡男であり、正遠にとっては初孫だった。男児は慣例で弥四郎と名付けられた。日野の若君について訊ねた時、僅かにその容貌に影が射すのをみた以外は、この倅に関しては心配なさそうだった。いずれ近い将来、楠木党の豊富な経済力を背景に殿上人に昇るだろう。この時代の名のある武士がそうであったように正遠もまた、多くの豪族と誼を通じ、かれらの女との間にそれぞれ子を為した。多くの子どもが幼児のうちに天に召されるなかで次男の多聞丸が先ごろ元服し、楠木正成となった。泉州の和田氏との間に設けた海童丸も遅しく育っていると傳役から聴いている。いずれこの三人が合力して楠木の大海を育てていってもらうのが、既に老齢の域に達したかれの願いなのだが、その本拠地である河内国を担うことになる次男・正成という人物を父親ながら計りかねていた。

恩智川の下流から、戦に備えた騎馬・徒歩の群とともに武具を積んだと思しき船が縦列で近付いて来る。先頭から数艘には縄で縛られた青竹が満載されており、その上で銅拍子を叩きながら指揮を執る若者がいる。

―雉丸―改め佐介は、櫓の上の正遠を見つけると深々と一礼し、船を急がせた。
気付くと隣に恩智左近がいた。この「相棒」ともしばらくぶりだ。長らくの労苦を労う正遠を制し、かれはひと言

―よき俸をかたじけのうござる―と頭を下げた。続いて何やら石礫のようなものを満載した船団が続く。指揮を執るのは石川源三郎。かれも楠木党の次期待大将として大いに期待できる若武者になった。しかし肝心の弓や矢を積んだ船が来ない。訝しむ正遠の眼下に次に現れたのは、青菜のようなものを大量に積んだ船だった。やがてその数艘は池島館の厨へと続く水路に入り、青菜の山から躍り出た若者が待ち受ける下女たちに菜の束を受け渡してゆく。

―もしや―と凝視したその若者は間違ひなく正遠の俸―多聞丸―改め―楠木正成だった―
初陣を前に鎧直垂すら身に付けないまま青菜を運ぶ俸。その足下でぎこちなながらも兄に倣って青菜の束を下女に放り投げるもうひとりの俸―海童丸(後の正季)―がいる。

左近のはなしでは「たもんのあにうえといっしょにたたかう」と言ってきた幼児を「館までなら」という約束で連れて来たとのことだ。海童丸はそこで船を降ろされ左近に抱かれて櫓の上に連れてこられ、正遠の腕に受け渡された。二年半ぶりの我が子は、重かった。

―誰―という眼で振り返る海童丸に、左近が―ち・ち・う・え―と伝えると、幼児も真似して「ちちうえ」と発声する。正遠は胸を熱くしながら、その豊かな髪を撫で、船団の行方を追う。船は縦列のまま池島館の外周を廻りやがて青竹と石礫の船がそれぞれワンセットになって待機する。その様子を眺めながら正遠は呟いた。

―正成、そう来るか―